



「細川刑部邸」
江戸時代の細川刑部家の別荘。もともと東子飼町にあったが、火の国フェスタ開幕に伴い熊本城内に移築、復元された。玄関、書院、春松閣、書斎などからなる典型的な上級武家屋敷である。フェスタ終了後は再整備して、来春から一般公開される。



「峠の茶屋公園」
金峰山にあり、夏目漱石の小説「草枕」に登場する峠の茶屋を復元したもの。周辺は公園として整備され、園内には売店と漱石ゆかりの品々や昔の農機具などが展示されている資料館がある。



「寂心さんの楠」
樹齢800年以上、高さ29メートル、幹回り14メートルにも及ぶ巨木で、戦国時代の肥後の武家領主、鹿子木寂心の墓碑をその幹に抱き込んでいるといわれる。



「浜田阿蘇神社」
この神社には豊作祈願の獅子舞が約300年も前から伝わる。2匹の獅子が真っ赤な髪を振り乱し、赤い唐牡丹を激しく舞い合うこの獅子舞は毎年10月17日に奉納される。

ビルの群れを夕陽が赤く染める
幕末、明治、そして現代
変わらぬのはこの空と夕陽だけ

日本を動かした明治の先人たち

激動の時代と言われる明治。
幕末から明治にかけて
時代を動かした
熊本の先人たちの
足跡を辿った。

▼波乱万丈の人生

幕末の思想家で、明治時代を開いた人物の一人として知られる横井小楠。小楠は吉田松陰、勝海舟、坂本竜馬らに多大な影響を与え、藩内よりむしろ中央での評価が高かった。明治二年、新政府の参事として上京、暗殺される。享年六十一歳。沼津にある旧居「四時軒」には小楠に関する資料を収めた



四時軒 「横井小楠記念館」も隣接している。四時軒の縁側から穏やかな風景を眺めながら、小楠の波乱に満ちた生涯に思いを馳せた。

▼揺れる時代を象徴

小楠らの活躍で新しい日本が誕生した。しかし、時代はまだ揺れていた。明治九年の「神風連の乱」は、その揺れる時代を象徴する出来事の一つだ。



新開大神宮

政府の欧化政策に危機感を持った士族たちが拳兵。首領の大田黒伴雄が宮司を務めた内田町の「新開大神宮」は、干拓地の中にボツンと鎮守の森を浮かび上がらせている。

刀槍で武装した百七十余人は、熊本鎮台や鎮台司令官邸などを襲撃。奇襲は一時成功したかのように見えたが、鎮台兵の銃の前に刀折れ、百二十四人が自らの信念に殉じた。その魂は今、立田山の麓、黒髪桜山神社に静かに眠っている。

▼文壇、論壇の両雄

明治のベストセラー「不如帰」の著者、徳富蘆花も揺れる時代の目撃者。

大江の徳富家と川一つ隔てた熊本鎮台司令官の種田政明邸を神風連の兵士たちが襲う。当時九歳だった蘆花の心にこの出来事は強烈な印象を与えた。後に、蘆花は小説「恐ろしき一夜」に当時の情景を描いている。



徳富記念館

一方、兄

蘇峰は明治十五年、弱冠二十歳で自宅に大江義塾を開く。自由平等の思想に基づいたこの塾に、中国革命で活躍した宮崎滔天も学んだ。四年後、蘇峰は上京。翌年、雑誌「国民之友」を発刊し、日本の言論界の先駆者として活躍する。旧居のある「徳富記念館」の庭園では、明治の文壇、論壇を支えた徳富兄弟の功績を称えるかのように、カタルパや椎の木が冬空に枝を伸ばしている。



本と言葉界の先駆者として活躍する。旧居のある「徳富記念館」の庭園では、

▼熊本近代化の父

熊本の地でも確実に西洋近代文明が浸透していた。明治四年、教育の近代化を目的とした「熊本洋学校」が創立された。L・L・ジェーンズが教師としてアメリカから来熊。授業は全て英語で行い、日本で初めて男女共学も実



ジェーンズ邸

施。また、キャベツやレタスなどの西洋野菜の栽培、牛乳や牛肉を食べることも普及させた。日本赤十字発祥の地ともなった「洋学校教師館」、別称ジェーンズ邸が水前寺に移築、保存されている。コロナ風の美しい建物には、当時の写真や資料、卒業生らの記録などが展示されている。

ジェーンズの薫陶を受けた学生たちは明治九年、花岡山で「キリスト教によって祖国を救う」ことを誓い合う。後に「熊本バンド」と呼ばれるこの学生たちの中から、蘇峰、海老名弾正、金森道倫など各界の多くのリーダーたちが輩出する。今、花岡山の頂上に立つ熊本バンドの祈禱会の記念碑が立っている。



熊本バンドの丘(花岡山)



花岡山から見た熊本市街

眼下に広がるかつての城下町。夕陽に照らされたビル群が赤く染まり、白川がキラキラと輝いている。時代が、人が、街が変わっても、先人たちの偉業、熱い思いが時代を超えてドクドクと胸に鋭く迫ってくるようだ。